

文化財を訪ねて

—見てある記—

古代の製鉄工場

宮ノ脇遺跡



宮ノ脇遺跡周辺航空写真

台耕地遺跡などがあります。日本での鉄の生産と使用は弥生時代に始まりますが、律令国家による行政機構の整備などが進む奈良時代になると、農具や工具あるいは武器・武具など鉄製品の需要が高まり、各地に製鉄炉などが作られるようになりました。宮ノ脇遺跡ではこれまで3回の調査で、古代の堅穴住居跡31軒とともに、堅型炉と呼ばれる製鉄炉や住居内に設けられた鍛冶炉が発見されました。また、炉に空気を送るための羽口や、不純物として排出される鉄滓などが出土しています。



製鉄炉復元図

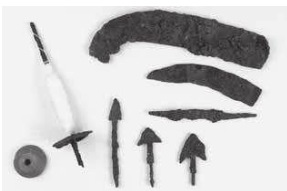
桶川駅から東へ4kmほど行くと、高野戸川が赤堀川に合流する地点があり、両河川に挟まれた東側へのびる台地の先端に宮ノ脇遺跡があります。このような台地を舌状台地と呼びますが、川の水面との標高差が少ない低台地で、近年まで台地上には住宅地と畑が広がり、低地は水田となっていた地域でした。宮ノ脇遺跡では、縄文時代から中世までの集落や館などが確認されています。特に注目できるのは奈良時代の製鉄に関わる遺構や遺物の発見でした。

古代の製鉄に必要な手順には、砂鉄と木炭を炉に入れて鉄を製錬・精錬する工程と、鉄素材を加工して製品にする鍛冶を行う工程があり、宮ノ脇遺跡では製鉄と鍛冶の2つの工程に必要な施設が発見されています。このような鉄生産を行うためには、砂鉄などの原料と燃料となる木炭が必要です。

さらに木炭を作るには、原材料であるクスギ・コナラなどの広葉樹を獲得できる森林と炭焼き窯が存在しなければなりません。「砂鉄七里に炭三里」という言葉がありますが、炭は三里以上運ぶのが困難であることを表わす言葉で、遠方ではなく周辺から炭を調達したことを示しています。大宮台地の製鉄遺跡には、炭焼き窯が付属することが知られており、宮ノ脇遺跡でも周辺に炭焼き窯があったと考えられます。

宮ノ脇遺跡で発見された製鉄遺跡は、砂鉄や鉄製品の輸送ルートが確立された台地上の村に、製鉄技術を持った集団が短期間に操業しており、村の周囲には炭の原料となる広葉樹林が広がっていた古代景観を想定することができます。

宮ノ脇遺跡から出土した土器などの遺物は、桶川市歴史民俗資料館に展示されています。



出土品（鉄類）